

## トピック A

## 青少年にみる組織的スポーツへの参加動機の動向

明治大学 政治経済学部  
准教授 高峰 修

過去4回の「10代のスポーツライフに関する調査」では毎回、運動・スポーツを行った理由、あるいはやっ  
てよかった理由を質問してきており、データの蓄積が進んでいる。わが国の青少年が、運動・スポーツを実  
施する場合、半数がスポーツ少年団や運動部活動、大学のスポーツ系サークルなど何らかのスポーツ組織に  
所属して行っている(図3-1, p.62)。しかし、こうしたスポーツ組織への所属と運動・スポーツの実施理由  
の関わりについてはこれまで検討されていない。そこで本稿では、運動・スポーツの実施理由をスポーツ組  
織への所属という観点から分析し、青少年のスポーツに対するニーズとスポーツ組織への所属状況との関連  
について検討した。

なお、「運動・スポーツの実施理由」は運動部活動やスポーツクラブなどの活動に限定してたずねてはい  
ないが、分析対象の約4割は「運動部活動やクラブに所属しているから」と回答した。それらはスポーツ組  
織に所属しての運動・スポーツ実施が理由であると捉え、今回の分析では「運動部活動やクラブに所属して  
いるから」の項目は除外した。

## A-1 スポーツ組織への所属別にみた運動・スポーツ実施理由

表A-1には、運動・スポーツ、運動あそびを行った理  
由を運動部活動やスポーツクラブなどスポーツ組織への  
所属群別に示した。スポーツ組織への所属状況(所属  
群/所属経験群/無所属群)と各実施理由(該当/非  
該当)との間でカイ二乗検定を行ったところ、19項目中  
16項目において有意な関連が認められた。そのうち12  
項目では、各実施理由に該当する者が所属群において多  
く、無所属群で少ないという傾向が確認された。

回答の割合が高かった実施理由は、「楽しいから」「か  
らだを動かしたいから」「体力をつけたいから」「うまくなり  
たいから」などであった。カイ二乗検定結果からは、この  
うち「からだを動かしたい」「体力をつけたい」「うまくなり  
たい」を実施理由として回答した者が、何らかのスポーツ  
組織に所属して運動・スポーツを実施している傾向を確認  
できる。他方、「楽しいから」という実施理由はスポー  
ツ組織への所属者のみならず、組織には所属せずに運  
動・スポーツを実施している者にも高い割合で共有されて

いた。また、所属群よりも無所属群の割合が高かった実  
施理由は「友だちにさそわれたから」「みんながやって  
いるから」「他にすることがないから」であり、いずれも受動  
的な理由である。

ところで、スポーツ組織への所属状況は性別や学校  
期、あるいは運動・スポーツ実施頻度と有意で強い関連  
をもっている。ここでは運動・スポーツ実施頻度とスポー  
ツ組織への所属の関連に着目し、両変数のクロス集計  
結果を表A-2に示した。カイ二乗値は高く(257.311)、  
0.1%水準の有意な関連があり、中頻度群の6割以上、  
高頻度群の7割以上がスポーツ組織への所属群であっ  
た。言い換えれば、運動部活動やクラブへの所属によっ  
て週3回以上の中頻度、あるいは週7回以上という高頻  
度の運動・スポーツ実施が実現している実態を示してい  
る。また、週3回未満の低頻度群のうち、スポーツ組織  
に所属しているのは約25%であり、残りはスポーツ組織  
には所属せずに運動・スポーツを実施している者となる。

【表A-1】スポーツ組織への所属群別にみた運動・スポーツ実施理由

実施理由	全体	スポーツ組織所属群 (n=1,568)			χ <sup>2</sup> 値
		所属群 (n=905)	所属経験群 (n=408)	無所属群 (n=255)	
楽しいから	64.1	66.0	61.0	63.5	3.062n.s.
からだを動かしたいから	49.9	52.9	52.0	36.9	21.333***
体力をつけたいから	45.9	52.6	41.4	29.8	46.228***
うまくなりたいから	45.3	57.2	31.6	25.1	124.849***
試合で勝ちたいから	31.2	45.1	16.4	6.3	196.175***
仲のいい友だちがいるから	28.6	30.9	25.7	25.1	5.591n.s.
友達にさそわれたから	27.6	22.8	33.6	35.3	25.442***
友達と一緒に活動したいから	26.8	31.0	22.5	18.0	22.102***
健康でいたいから	25.1	26.7	27.2	16.5	12.322**
目標を達成したいから	24.0	31.9	15.7	10.6	71.316***
みんながやっているから	16.2	14.6	17.6	20.8	6.214*
ライバルに勝ちたいから	13.2	18.7	7.1	5.1	50.573***
自信をもちたいから	12.3	15.6	8.8	6.3	22.167***
あきらめない気持ちをもちたいから	10.9	14.8	5.6	5.1	34.854***
他にすることがないから	10.5	7.5	11.8	19.6	31.549***
新しい友達と知り合えそうだから	10.0	12.7	6.9	5.1	18.720***
進学や就職にいかせそうだから	7.0	10.3	3.2	0.8	39.730***
周りの人に「すごい」と言われたいから	6.7	8.5	5.1	3.5	10.195**
家族や先生にすすめられたから	6.6	7.3	5.4	6.7	1.626n.s.

注1) カイ二乗検定における自由度はいずれも2。  
 注2) \*:p < 0.05、\*\*:p < 0.01、\*\*\*:p < 0.001  
 注3) 「運動部活動やクラブに所属しているから」は分析対象項目から除外した。

■ 統計的に有意に分布が多い  
 ■ 統計的に有意に分布が少ない

資料：笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2013

【表A-2】運動・スポーツ実施頻度群とスポーツ組織への所属群

		所属群	所属経験群	無所属群	合計
低頻度群 (年1回以上週3回未満)	n	102	162	135	399
	%	25.6	40.6	33.8	100.0
中頻度群 (週3回以上週7回未満)	n	297	124	62	483
	%	61.5	25.7	12.8	100.0
高頻度群 (週7回以上)	n	514	126	60	700
	%	73.4	18.0	8.6	100.0
合計	n	913	412	257	1,582
	%	57.7	26.0	16.2	100.0

χ<sup>2</sup>=257.311、df=4、p<0.001

■ 統計的に有意に分布が多い  
 ■ 統計的に有意に分布が少ない

資料：笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2013

**A-2 運動・スポーツ実施頻度別およびスポーツ組織への所属別にみた運動・スポーツの実施理由**

運動・スポーツ実施理由について運動・スポーツ実施頻度とスポーツ組織への所属の組み合わせにより詳細に検討した。表A-2で示した所属群と無所属群を取り出し、それぞれの群の運動・スポーツ実施理由上位10位までを運動・スポーツ実施頻度群ごとに示した(表A-3)。

低頻度群をみると、分析対象とした10項目のうち6項目で、それらの実施理由に該当する者の割合が所属群と無所属群の間で有意に異なっており、さらに該当者の人数はいずれも所属群に偏っていた。つまり、低頻度群では、スポーツ組織に所属している者は所属していない者よりも多様な実施理由によって動機づけられている。具体的には、「健康でいたいから」「からだを動かしたいから」「体力をつけたいから」といった身体面に関する理由、「うまくなりたいたいから」「試合で勝ちたいから」といった卓越性に関する理由、「友だちと一緒に活動したいから」の友人関係に関する理由に該当する者が無所属群よりも所属群で多かった。

次に中頻度群の実施理由をみると、所属群と無所属群とで分布が有意に異なっていたのは10項目中4項目であった。そのうち「うまくなりたいたい」「試合に勝ちたい」「目標を達成したい」の3項目においては、無所属群よりも所属群が多かった。中頻度群において分布に偏りが認められたもうひとつの実施理由「友だちにさそわれたから」では、所属群よりも無所属群に有意に偏っており、これは表A-3に示した分析結果において唯一逆転した傾向であった。

高頻度群における運動・スポーツ実施理由とスポーツ組織への所属の関連は、中頻度群とほぼ同様の傾向を示しており、中頻度群と高頻度群は、実施理由の観点からみるとほぼ同質のグループであると考えられる。

**【表A-3】 運動・スポーツ実施頻度群における運動・スポーツの実施理由(スポーツ組織への所属群別)** (%)

実施理由	低頻度群(n=235)			中頻度群(n=354)			高頻度群(n=571)		
	所属群 (n=100)	無所属群 (n=135)	χ <sup>2</sup> 値	所属群 (n=294)	無所属群 (n=60)	χ <sup>2</sup> 値	所属群 (n=511)	無所属群 (n=60)	χ <sup>2</sup> 値
楽しいから	61.0	58.5	0.147n.s.	59.9	68.3	1.507n.s.	70.5	70.0	0.005n.s.
からだを動かしたいから	49.0	31.9	7.091*	50.3	36.7	3.732n.s.	55.2	48.3	1.017n.s.
体力をつけたいから	42.0	16.3	19.152***	43.5	38.3	0.552n.s.	59.9	51.7	1.499n.s.
うまくなりたいたいから	36.0	14.1	15.406***	50.0	35.0	4.496*	65.6	40.0	15.025***
試合で勝ちたいから	13.0	3.7	7.019*	37.8	6.7	21.959***	55.6	11.7	41.428***
仲のいい友だちがいるから	28.0	20.0	2.051n.s.	25.9	31.7	0.859n.s.	34.4	30.0	0.472n.s.
友だちにさそわれたから	32.0	36.3	0.469n.s.	17.7	38.3	12.721***	23.9	30.0	1.089n.s.
友だちと一緒に活動したいから	28.0	13.3	7.850**	25.9	23.3	0.167n.s.	34.6	23.3	3.083n.s.
健康でいたいから	21.0	10.4	5.121*	20.4	16.7	0.440n.s.	31.5	30.0	0.057n.s.
目標を達成したいから	14.0	6.7	3.499n.s.	25.2	10.0	6.556*	39.3	20.0	8.583**

注) 「運動部活動やクラブに所属しているから」は分析対象項目から除外した。

■ 統計的に有意に分布が多い  
 □ 統計的に有意に分布が少ない

資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2013

## A-3

## 運動・スポーツ実施理由の量的側面にみられる傾向

次に運動・スポーツ実施理由の回答における量的側面について検討した。表A-3に示した10項目の実施理由について、該当すると回答した項目の合計数を算出し、運動・スポーツ実施理由得点とした。その得点の平均値の差をMann-Whitney検定とKruskal-Wallis検定を用いて比較したところ、性別、学校期、運動・スポーツ実施頻度そしてスポーツ組織所属のいずれの変数においても各カテゴリーの平均値に有意な差が認められた。

性別については女子よりも男子において運動・スポーツ実施理由得点の平均値が高く、学校期が進むにつれて平均値は低くなった。さらに低頻度群より高頻度群において、またスポーツ組織の無所属者より所属者において平均値は高かった。

すでに述べたように、性別、学校期、運動・スポーツ

実施頻度、スポーツ組織への所属という変数の間には強い関連が認められる。そこで運動・スポーツ実施理由得点を被説明変数、性別、学校期、運動・スポーツ実施頻度、スポーツ組織への所属の4変数を説明変数とするカテゴリカル回帰分析を行い、説明変数間の関連を勘案しながら運動・スポーツ実施理由得点に影響を及ぼす変数について検討した。その結果、性別以外の3変数が運動・スポーツ実施理由の総得点に有意な影響を及ぼしていた(表A-4)。学校期に関しては、大学生や勤労者よりも小学生のほうが多くの実施理由をもっていた。実施頻度に関しては、低頻度で行っている者よりも高頻度で行っている者ほど、スポーツ組織への所属に関しては、無所属者よりも所属者において、数多くの実施理由に動機づけられて運動・スポーツを行っている状況が示された。

【表A-4】 運動・スポーツ実施理由得点を被説明変数とするカテゴリカル回帰分析

	標準化係数		自由度	F	有意確率
	ベータ	標準誤差			
性別	-0.029	0.025	2	1.273	0.280
学校期	-0.125	0.024	5	26.18	0.000
運動・スポーツ実施頻度	0.276	0.026	3	116.039	0.000
スポーツ組織所属	-0.169	0.026	3	41.676	0.000

注)「運動部活動やクラブに所属しているから」は分析対象項目から除外した。

$R^2=0.165$ 、 $F=29.870^{***}$

資料: 笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2013

## A-4

## まとめ

運動・スポーツ実施理由とスポーツ組織への所属に関する分析によって、スキルや勝利などに関する理由をもつ者は、実施頻度に関わらずスポーツ組織への所属によって自らのニーズを満たそうとしている傾向がみられた。

量的な側面からみると、スポーツ組織への所属状況は実施理由の総数に有意に影響を及ぼしており、何らかのスポーツ組織に所属している者は無所属者に比べ、より多くの実施理由をもっていた。この傾向は実施頻度群別でみた場合に顕著になり、特に低頻度群ではスポーツ組

織に所属する者は無所属群よりも幅広い多様な実施理由をもっていた。

これらの結果より、10代の青少年がスキルや勝利などに関する実施理由をもち、そうしたニーズを満たすためにスポーツ組織に所属して運動やスポーツを実施している様子がうかがえる。同時に、スポーツ組織への所属は10代の多様な運動・スポーツの実施理由にも数多く対応しているといえるだろう。